

生徒のひと言ひと言を 受け止めて、受け流す

東京都台東区立御徒町台東中学校教諭 甲斐 利恵子

つい先日のことです。これからの単元を説明しているとき、いつも反抗的な態度を取りがちな生徒がひと言、「なんでそんなことしなきゃいけないんだよ。」と聞こえよがしに言いました。工夫してがんばろうと思っていたときだけに、すごく傷ついてしまい、とたんに自信がなくなっていました。

こんなとき、どのようにすればいいのでしょうか。



しまったひと言に傷つくのは当然です。中学生は、本当は二歩先に進むことを切望しているのだと思います。自分を深く理解し、成長させてくれる人を求めています。前回も述べましたが、生徒たちは自分を成長させてくれる人が大好きです。マンネリが大嫌いなくせに新しいことには用心深い。幼い子のように、言われたとおりなんでも「わーい!」というわけにはいかないものです。「大丈夫なのかよ。」と声に出しても、常に「大丈夫ならがんばる。」という気持ちで根底にはあります。説得力を求めているのです。

生徒のひと言ひと言に対して、「そんなの気にしない、気にしない。」と言って片づけてしまうこともできます。が、それよりはむしろ、そのひと言をしっかり受け止めてみるというのはどうでしょうか。「受け止めて、受け流す」のです(なんだか禅問答のようになってきましたね)。

「なんだこれだけか。つまんねえー。」

では、「受け止めて、受け流す」にはどうしたらいいのでしょうか。わたしの若いときの実践を紹介してみましょう。

確か外来語の単元でした。大村はまさに懂れていたわたしは、「よし、今度の単

生徒のひと言ひと言を真正面から受け、傷つきすぎたり、落ち込みすぎたり、得意になったりするのはいや、要注意です。日ごろからわたしたちは、生徒を受け止めるようとする習慣と同時に、常に「説明できる言葉」をもつて受け流す強さが必要です。

「なんでこんなことするのー。」
という言葉に傷つかず無視もせず、これからの学習をきちんと説明できたらいいですね。もちろん毎回生徒に説明しなくてもいい。フフ。と言ってみるのもかっこいいかもしれません。生徒たちは先生の真摯な姿をきちんと見てくれるものです。笑顔で共にがんばりましょう。



元は生徒一人ひとりに別々の教材を用意しよう。」と意気込んでいました。野球部の生徒には野球の新聞記事、テニス部の生徒にはテニスというように。一人ひとりの顔を思い浮かべながら対話するように、教材を用意しました。ドキドキしながら教室へ。案の定、生徒たちは大喜び。渡された封筒をのぞき込むうれしそうな顔。なんとも言えない温かい雰囲気がありました。

ところが、全員に封筒を渡し終えたとき、もう学習を始めていた生徒が「何調べるのー。」「カタカナ語と外来語ってどうやって見分けるのー。」「外来語を抜き出したあとどうするのー。」と矢継ぎ早に質問をします。最初に「外来語を抜き出して自分の考えをまとめなさい。」と言ってありました。にもかかわらず、生徒は質問してきます。「だから最初に言ったでしょ。抜き出してそれを見て、自分の外来語に対する考えをまとめるのよ!」

生徒たちは、自分だけの教材を手にしてうれしかったのだと思います。しっかり学習しようと思って質問したのだと思います。その結果、次のひと言が聞こえました。「なんだこれだけか。つまんねえー。」わたしは深く傷つきました。

まったく恥ずかしいことですが、そのときのわたしは、「一人ひとりの教材」を用意

した自分に酔っていました。この工夫を支える根本的な目標の設定が曖昧であり、どんな力をつけたくてこの工夫をしたのか「説明の言葉」をもちませんでした。だから、生徒の言葉に動揺し、漠然とした不快感で深く傷ついたのだと思います。

結果は悲惨でした。一人ひとり短いながら発表をしました。ほとんど全員の生徒が「外来語がいっぱいあることに気づきました。これからも外来語に注目していきたいと思います。」という内容です。今も「異口同音」という四字熟語を見ると悲しくなるのは、この不甲斐ない実践があったからでしょう。

教師は「説明できる言葉」をもつことが必要

この経験から、わたしはしっかりした「説明の言葉をもつべきだ。」と痛感しました。どんな力をつけたいのか、その目標にこの教材はふさわしいのか、有効な学習を実現するための手引きになり得ているのか。常に自分に問い続けて学習を組み立てていかなければなりません。「説明できる言葉」をもつて初めて、生徒の成長したい思いはしっかり「受け止めて、不快感で傷ついたり動揺したりすることなく「受け流す」ことができるのだと思います。